

¡Hola amigos!

RとNの Málaga からの手紙

(043号)

皆さんこんにちは。

このページは、私達のスペインでの日々の暮らしを友人・知人の皆さんに知って頂こうと思って開きました。 ですからごく私的なもので、読者のかたも大なり小なり私達をご存知だという想定で作成しています。そのつもりでご覧下さい。

各項の更新は不定期ですが、なるべく毎週末迄に何らかの更新をするつもりです。

更新日を確認の上各項目を選択してください。

2004年04月29日 R & N

目次	更新日
身辺雑記	2004年04月29日
Bar RyN	2004年04月29日
買い物百般	2004年04月29日
エクスカーション	2004年04月29日

ご注意 : 各項目のファイルは更新日から一ヶ月を経過したら削除します。
悪しからず。

* 身近雑記 *

「空家あり」の巻 2004年4月29日 更新

マタマタ、鳩の話で恐縮ですが、又しても異変があったのでお知らせしておきます。先週の更新までは半信半疑の状態でしたんですが、どうやら巣に座りこんでいた鳩は一羽ではなかったようです。吞まず食わずで、イヤ飲まず食わずで、です、いつもの変換は吞むという字ばかりなので「吞まず」になってしまいました。

とにかく「飲まず」食わずで、カワイソーとNが頻りにいうので、窓越しに少しジックリ観察してみました。そして、どうやら個体差があるらしい、二羽が交代で座っているらしいことに気付きました。ドッチが雌か判りませんが片方が明らかに小さい。大きい方は、人間で言えば猪首とでも言いましょうか、やや首が短いのです。

そのうち、決定的な瞬間を目撃しました、当直交代です。朝食を食べている時、Nがアッと声をあげました。最近移動した食卓のNの席からは目を上げると丁度寝室の窓越しに巣が見えるんです。メシの間も鳩の心配をしてたんだ、ツタク。まあとにかくこれで飲まず食わずの心配はしないで良くなったわけ。

それにしても、どうも納得がいきません。どう考えても、ちょっとの風でさえ大揺れに揺れるハカランダの木に、こんなチャチな巣で卵を安全に保持できるわけがありません。ホントに卵は入っているのだろうか？ 大いなる疑問です。でも、もし一羽だけがその気になって空っぽの巣に座り込んでいるなら、ソイツだけその気になっている事も有り得ないことではなさそうですが、二羽が交代してまで空っぽの巣を暖めるだろうか?? 考えた末、行き着いた答えは、コイツ達「ごっこ遊び」をしてるんじゃないのか??? という疑問です。だって、去年の夏も、同じ行動を居間の窓の方でやっていたのです。前科一犯です。どう考えても繁殖期とは思えない八月の猛暑の盛りに巣造りを始めて、一ヶ月程そんな素振りをしていましたが、そのうちに一羽が近くの街灯までしか来なくなり、ハカランダの木まで来ていたもう一羽も段々間遠になって結局それっきり。そういえば、その時も今度も小柄な方が主役です。



25日、日曜の朝。シャッターを開けたときは小柄の方が座っていました。アア、居るね、とNも一安心。ところが朝食をおえてあらためて見ると、この通り、巣は空っぽです。どうしちゃったノ、とNは気が気ではありません。どこかで例のホホーホッという鳴き声は聞こえています。近くにいることはいるんです。そのうち、この木から一番近い街灯に二羽がとまっているのが見えました。右側が小柄でやや首長、色白の方、この写真では黒く見えますがこれは建物の影に入ったため。左が大柄の方、どうやらコッチが雄らしい。巣は空家のままで、コイツラが家主に違いありません。





そのまま様子を見ていると、小柄の方はこのように時々巣に戻ったり、次の写真のようにもととの居間の前のハカラランダにとまったり落ち着きません。その間大柄の方は街灯にとまったまま。どうやら小柄の方はもっと「ごっこ遊び」をしたいのに、大柄の方は、もう付き合いきれん、という風。そのうちコッチも些かアホらしくなってきた頃、結局二羽ともドッカへ飛んでいってしまいました。

その後も小柄のほうは時々前の棟の塔屋にとまったり、居間の前の木にとまったり未練がましい動きでしたが、今日(水曜日)は未だ姿を見せません。どこかでホーホッは聞いてますから近くに来てることは間違いありません。やっぱり、卵なんてなかったんだ、ツタク、ナンテヤツラダ。



時々、居間の前のハカラランダに戻ってくる小柄。Nは、カワイイ、かわいい、と言いますが、Rの目には大マヌケに見えます。鳩だからカワイイでもマヌケでもそれっきりで済みますが、人間がこんな騒ぎをしてくれちゃ困りますね。



ところで、こんな木、見たことありますか？ 近くのロトンダ **rotonda** (ロータリー
又はラウンド・アバウト)に植えられている木ですが、丸い玉がはじけてこんな綿球
が出てくるのです。初めの玉は握りこぶし位、はじけた後は綿菓子位です。幹は両手
で抱える位、幹や太い枝には鋭いトゲトゲがあります。しじゅう通る所なのに去年は
全く気が付きませんでした。私達が写真を撮っていると、近くで立ち話してたスペイ
ンのオバサン達も一緒に上を見上げて、ビックリしていました。彼女たちも気付かな
かったんですね。そして私達にアルゴドン、アルゴドン **algodón**(綿よ綿)と教えてく
れるのです。でも、アルゴドンはこの位じゃないの？と背丈ぐらいを示すと「そう、
だけどこれもアルゴドンよ」後は早口で何をいってるのか分かりません、確かに綿と
して使えそうです。手触りは綿というより真綿にソックリ。

鳩の巣は相変わらず空家です。少し形も崩れてきました。巣の観察をしていて気付い
たんですが、この巣のすぐ下を毎日大勢の人が通り過ぎて行くんですが、誰一人巣の
事を知った人はなさそうです。この辺では上を向いて歩く人は少ないんです、そんな
事をしたら、すぐ犬の糞を踏んじゃいますからね。アルゴドンのオバサン達も同じ。

サテ、来週は休刊とします。私達も空家探しです。それとセビージャに遠足。***

* B a r R y N *

「高濃度アルコール」の巻 2004年4月29日 更新

強い酒が好きです。それをストレートでやっつけるのが一番。などと言うと、いかにも酒豪のように聞えますが、量はほんのチョップリ、ショットグラスで一つだけ、ごくたまに二つ、それ以上はありません。近頃とみに自制心が育ちつつあるのです、遅ればせに・・・且つヨンドコロナク・・・。まあ、寝酒は強い酒に限ります。

スペインの酒事情で一番の不満は「良いブランデー」がないこと。これだけ葡萄の産額、ワインの産額が多い国、しかもシェリーのたぐいは豊富なのに何故かブランデーのイイのに当てていません。だから、仕方なくブランデーはお隣フランスのものに頼るんですが、腹立たしい事にコレが日本で買うより高いんです。全く同じモノが日本のディスカウント店の二倍近い値段です。何故こういうことになるのか。例えばベルギー・ビールなんかは日本の半値位なのにフランスのブランデーに限っては特別の高値です。「高値」の花なんです。スコッチも比較的高目です。酒は国産のものを呑めということでしょうか。

一方で安い国産の強い酒は色々有ります。前にチンチョン **chinchón** という酒を紹介しましたが憶えてますか？ これはチンチョンというマドリー(ド)に近い田舎町で造られるアニス酒ですが、勿論アニス酒はこれだけではありません。

スペインの強い酒のベースは大抵オルーホ **orujo** という焼酎で、それに色々な味や香りをつけたモノが多いようです。オルーホに付いてはやはり以前「葡萄の焼酎」というタイトルでガリシアのクセモノ、アグワルディエンテ **aguardiente** を紹介しました。これがやはりオルーホなのです。要するにオルーホとはワインを造るため絞った葡萄の絞り粕で造る焼酎なのです。チリやペルーなど南米ではピスコと叫んでいるのがコレだと思います。西和辞典では「ピスコ **pisco**=ペルーの **Pisco** 産のブランデー」となっていますが、オー・ノーだと思います。編者はきっと呑んだことがないんでしょう。何しろコッチは南米西岸の各港での実戦経験があります。



まず、左。トテモとてもペルーの「ブランデー」なんていうオ上品なシロモノではありません、大クセモノ。ラベルの下の方に **55% Vol** とあるのが見えると思います。また一番上には BIDESTILADO という単語も見えますね。bi は「二重に」という接頭語 **destilado** は「蒸留した」ですから絞り粕を発酵・蒸留して作った焼酎を更にもう一度蒸留してアルコールを高めるのでしょう。そうして出来た高アルコール度数のものにアニスで味と香りをつける訳です。日本でも奄美や沖縄には同じような方法でアルコール濃度を高めたものがあるようですが、残念ながら45度までしか経験しませんでした。瓶の向こうに回りこんで見えませんが EXTRA SECO とも書いてあります。超辛口、55度なんだから当たり前ですね。ところが味そのものは、アニスのクセでかなり甘味が強いんです。右は同じくオルーホにイエブラ **hiebra**(=各種香草)で味・香りをつけたもの。ウチではコレらを瓶ごと冷凍庫にぶち込んで、ショット・グラスも一緒に凍らせておいてストレートでやっつけます。アニスのエキスだけが凍って結晶体になり、キラキラと綺麗です。なんとNも付き合います。マケソー。***

* 買い物百般 *

「小魚」の巻 2004年4月29日 更新

去年の四、五月には、結構いいマグロがこの辺の魚屋にも現れて、何回かニギリや照り焼きを楽しみましたが、今年は三月に一度、いいのを買えただけです。

理由の一つは、私たち自身がもうここの魚にはほとんど絶望状態で、熱心に魚屋を覗く気があまりなくなった所為もあるでしょう。そうはいつでも旨い魚を食いたい、と言う気持は常に有りますから、横目でチラッと見る程度には気を付けています。

そして、最近は大いサイズのものも諦めて、小魚に注目しています。勿論、小さいサイズですから、おろして刺身というわけにはゆかず、料理法はおのずと限られてきますね。先ず、唐揚げ。少し大きければ丸ごと煮付け。または塩焼き。

幸いな事に、ココでは良質のオリーブ油が安く手に入るのので、揚げ物にもオリーブ油を使います。ドレッシング代わりに、そのまま野菜やトーストにかけて食べられるような美味しいオリーブ油で揚げるので、当然ながら軽くアッサリした揚げ物になります。エキストラ・バージン・オイルでの揚げ物は日本ではチョットした贅沢ですね。

先ずは、次の一枚。一塩で美味しい山陰地方特産ササガレイ、標準和名ではヤナギムシガレイに似ていると思いますが、どうでしょう。但しこれは目が魚体の左側についてます。左ヒラメに右カレイという言葉から言えばカレイではない、ということになります。図鑑では目が左のカレイもあるので、魚の名前はとても難しい。

スペイン版魚類図鑑で見ると **gallo** というのに似ていますが、これを西和で引くと全く違う魚になっていて、例の通り魚の名前に関しては辞書は全く役に立ちません。本当は軽く塩をあてて、風干しにでもしてみたいのですが、蠅が来るだろうし、私達にはたいして気にならない魚の匂いも、隣近所のイギリス人やドイツ人からは顰蹙を買おうなので見合わせています。盆ザルでもあれば冷蔵庫干物にでもするんですがまあ、今のところそれほどの熱意もありません。カディスへでも行けばセイセイと干物作りもできるんじゃないか？スペイン人は魚の匂いなんか気にしませんからね。



デ、これは当然ながらオリーブ油で唐揚げ。低温でジックリ小骨が気にならない位になるまでカリカリに揚げます。アツアツにライムを絞るとセルベサにはもってこいの

アテになります。アグハ **aguja** という弱発泡性の白にも悪くありません。

この手の揚げ物には、前にお話ししたモホ、あのカナリー特産の唐辛子調味料ですがこれのベルデ(緑) **verde** がなんとも絶妙のコンビです。例のデパート系列のスーパーCOR(コル)にこの魚が並んでいました。ここならチャンと名前を表示してある筈。

良く見るとタパス・ペケーニョ(小さい蓋)。デタラメです。



二枚目は、日本でダルマガレイと呼んでいるものに違いないと思います。「カレイ」といっているのに目が左にある一例です。これは一枚目の写真のものよりやや大きく肉厚でもあったので、丸ごと煮付けにしてみました。メイタのようなマズマズの味でした。こういう小魚がいつも有れば料理法もいろいろ工夫できるのですが、こんなものは毎日魚屋を覗いても、ハンパな数で大きさもまちまちのものがたまに台の隅にころがっている程度です。所謂、雑魚でしかないんですね。



最後はサルディナ **sardina** =マイワシ。日本のオオバのように星がはっきりしていません。形も少し違いますね。同じサルディナといって売っているものでも、スーパーの魚売り場などに大量に置いてあるものはもっと平べったい感じです。産地の違いかも知れませんが、どちらかというとなら（ママカリ）に似た感じです。

一枚目の写真のササガレイに似たものですが、コレだってちゃんとした名前はある筈で、断じて「小さい蓋」などである筈がありません。これは「ママカリ」的愛称であるに違いないんです。英語国でも感ずる事ですが、一般に日本以外の国では魚の名前はかなりイイカゲンなところがあります。例えばハタ・カサゴの類を全てロック・コッド **rock cod** で片付けてしまうみたいです。カサゴが「岩のタラ」の筈はなく、夫々の種に英語の標準名はある筈なのに、魚名には詳しいはずの釣り道具屋の店主なんかでもロック・コッドです。まあ、日本でも漁師はかえって標準和名には疎く、子供の頃から口伝えに憶えた地方名でしか言いませんが、こんな十把一絡げは使いません。スペインでも商品表示をもっとキチンとしなけりゃと、先日もテレビでいっていたようですが、そういうことが一番の苦手なんじゃないでしょうか。私達は商品表示はかなり慎重に見るほうです。ナジミのないものばかり食べるわけですから、そうせざるをえません。初めの頃は勿論、今でもスーパーへは電子西英辞典持参です。でも、ラベルの単語は辞書に出てないものが多く、結局見当をつけて買うしかないんです。それにしてもイワシを焼くのは屋外で炭火、強火の遠火が一番。ウチのように電熱ではどうもうまくいきません。ポニー・テールとペペに任せた方がいいようです。

イワシは目黒じゃなくてマラゲータに限るカ？***

エクスカーション

「自転車まつり」の巻 2004年4月29日 更新

今回はこれまでのエクスカーションの中では最短距離、アパルタメントの玄関から、
そうですね、およそ200メートル以内の範囲を歩き回っただけです。

私達の寝室の窓から、真っ直ぐ西に7~80メートル離れたところに交差点があります。この交差点を出発点にして毎年4月最後の日曜日に自転車レースがあるんです。レースといっても本格的なものではなく、大人も子供も一緒に楽しむための自転車まつりで、仮装あり、凝った手作り自転車あり、ハジメッからレースに勝とうなんて気は全くなく、それこそ参加することに意義あり、的なお祭りです。

スペインはヨーロッパの他の国々同様、自転車競技の盛んな国で、テレビでもしょっちゅうロード・レースの結果を放送しているし、実況中継もやっています。

私達はここへ来る一年前から車の運転は止めていて、スペインへ行ったら先ず折りたたみ自転車を買おうと考えていました。自転車に乗って行けるだけ行って、バスで帰って来る、そして次はそこまでバスで行って、また自転車で更にその先へ行って、帰りは又バス・電車、ということをやろうと思っていたのです。しかし、ここへ来てじきにこの計画は諦めました。先ず私達が住みついたところが坂の町で、ココから脱出する又は帰り着くのが自転車ではあまりにキツイこと、それとスペインの交通事情があまりに危険一杯で、この国では歩くのが一番安全、と納得したからです。

もう一つ一番大きな理由は、折りたたみ自転車が見つからないのです。ないことはないんですが、余程大きな自転車屋へいっても、折りたたみはせいぜい一台あるかなしかというありさまです。日本にいた時、東急ハンズ等で日本製だけでなくフランス・イギリス・ドイツなどの欧州各国の折りたたみ自転車を見て、これなら大丈夫、スペインでも欧州の品物が手に入るに違いないと思っていました。ところが、実際は、折りたたみってナニ?という位の状態です。2~3の店で聞いて見たりもしたんです。

店主は「折りたたみ」と聞くなりウーンと腕組み。コリャだめだー。



(左：近所のパン屋の前の歩道がエントリー・カウンターに早変わり)

(右：付近の交通は全て遮断。交差点の向こうでスタートを待つ参加者たち)

それでも、自転車は欲しいなあーと思っはいましたが、とにかく坂の町、普通の人は殆ど自転車に乗ることがないみたいでした。自転車屋の店頭でも、見かけるのはMTBやBMXまたはロード・レーサーなど競技用自転車ばかりで、ママチャリなんて一台もありません。だからこの街では自転車を持ってる人も少ないんだなと思っはいましたが、去年のこのお祭りをみてビックリ仰天、いるわいるわ、どこにこれだけの自転車を隠してあったんだ、と思うくらい。やはり多いのは競技用ですが、子供用の補助輪つきや普通の自転車もけっこうあります。一体この人たちはこの坂の街のどこで乗ってるんだろう？今年のエントリーは979台あったそうです。



(この親子は手製のゼッケンで出発点からではなく途中からオープン参加、らしい)



(いよいよスタート。でも、最初のコーナーまでは助走区間でパトカーが先導)



先頭集団のこの連中はヤル気十分のワルガキ、本気でハヤっている。お祭りとはいってもやっぱりレースである以上1, 2, 3位くらいには賞品も出るんでしょね。パトカー、はよ、どいてくれ、と言わんばかり。この連中はBMXばかりで、普段、近所のBMX練習場でたむろしている連中らしい。



やる気満々の連中が入った最初のグループがコーナーの向こうに消えた後、二回目のスタート。今度は速く走ろうなんて気も、最後まで落伍しないようになって悲壮感も全くないオキラク・グループ。コッチがお祭りの本番。先導の白バイ(実は青バイ)も参加者に声を掛けたりしてリラックス。バギーを押したママさんもいたり、みんな普通に歩くスピード。この一団には色々な趣向を凝らした仮装や変形自転車一杯。



こんなものをこいで十キロ近くもとても走れるもんじゃありません、どうせ見物人が少なくなったところでリタイヤは目に見えています。左の熱帯魚は左右の呼吸を合わせるのが難しそうでカーブでは大分苦労していました。右のはどういうつもりか？周りのその気になればいくらでも走れそうな男たちは護衛に徹しているのか？アホな奴。



(左：二人乗り自転車に4人乗りの親子とダルメシアン。右：こっちはプードル)



(黒いブルにマタがる颯爽のマタドルと見てる方がツカレルおじさん)



(スーパーマンと極小三輪車。何故かローラー・スケートのオニーさんも飛び入り)
こんな具合に延々とのおんぴりとレースは続きます。小さい写真に写った人たちはハナッから完走するなんて気はなく、第一コーナーを回ったらヤメタ、なのかも。



(左：リアル・マドリッド兄弟。右：ド派手兄貴と地味ヘン舍弟)



参加者は、特に子連れの参加者はスペインの人が大部分。見物人の国籍は様々。みんな楽しそうに見ていましたが、ワン君だけは蚊帳の外。こうして楽しそうに自転車に乗っているのを見ると、また「自転車欲しい」という気が起きますが、今の住宅事情ではベランダにでも引っ張り込まないとしょうがないし、この坂の町、たとえ持っても持ち腐れは目に見えています。ココでは折りたたみはないのに電動自転車はやたらに種類が沢山あり、電動車だけの特設売り場も見ました。でも乗ってる人は見たことないなー。上り坂の途中で電気がなくなったら、と考えるだけで買う人はなくなるでしょう。そして今日もこれだけの数の中、折りたたみは見えませんでした。***
